
恐怖から出でる -BLEACH × 戦国BASARA3-

外国人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖から出でる - BLEACH×戦国BASARA3 -

【Nコード】

N0179Q

【作者名】

外国人

【あらすじ】

関ヶ原の戦いに敗れた「凶王三成^{きょうおうさんせい}」こと石田三成。彼の意識が遠のいた先にあつたのは死神の世界だった。謎の力を持つ三成を追う護廷十三隊。果たして、三成の行く道とは！？ 不定期連載です。

prologue - 変わりゆく歴史と、移りゆく意識と―（前書き）

―揺れた紫の一輪花

散り行く花弁 向かうはどの場所へ―

prologue - 変わりゆく歴史と、移りゆく意識とー

慶長5年（1600年） 関ヶ原の戦い

雨が降っていた、とまらぬくらいの

「家康様、やりましたね!!」

「これで天下はついに、徳川のものとなりましょうぞ!!」

家臣らの声が聞こえる

ワシは、三成の骸の前に立ち尽くす

「どうしましたか？家康さ…」

「悪いが…少し一人にしてくれないか」

「は、はっ。わかりました」

家臣は去っていく、しかし忠勝だけそこにまだ残っていた

「忠勝、すまないが…」

忠勝はたぶん、ワシを心配しておるのだろう
しぶしぶ、去っていく

ワシ以外誰もいない。あるのは三成の骸。

「なあ、三成。ワシが成し遂げたかった天下統一は、本当に」
「本当にこれでよかったのだろうか・・・」

気づかぬ内に涙を流す

こんな姿、誰にも見せられぬ

家康はそつと、三成を持ち上げ
どこかにつれて行くのだった。

- 所在 不明 -

闇。闇。闇。

何も…何も見えない、聞こえない

ここはどこだ？

私はなぜここにいるのだ

刑部！！官兵衛！！

いるのか…！！返事をしろ！！

私は・・・わたしは・・・！！

負け、たのか・・・！？

死んだのか　私が!!

家康・・・家康!!!!!!

まだ、まだ復讐は果たしておらぬぞ!!

必ず・・・必ず・・・貴様を・・・!!

彼の意識は、そこで途切れた

prologue - 変わりゆく歴史と、移りゆく意識とー（後書き）

はじめまして、自己満足な小説になるやもしれませんが

これからBLEACHキャラとてんやわんやする展開になるはずです

BLEACHは藍染を倒してから数ヶ月のような時間軸となっております
ります

主に出して欲しいキャラなどいましたら一声かけてみてください

よろしくお願いいたします。

episode 1 - 処移し、何処へ参れ -

長く続いた、藍染や破面アランカルとの戦いが終わり、

ソウルソサエティ
尸魂界ではしばらく休息の時期だった

しかし、減ることはない虚ホロウの事件や破面の資料をまとめるなどの仕事におわれることとなり

結局は数ヶ月で元の尸魂界にもどるのであった

そして、それから更に数週間後。

- 尸魂界 瀟霊廷のとある一角 -

場所は食事処

そこに手を伸ばし

リラックスする者がいた

「ううん、ここところ根詰めってたし、
やっと休めるわあ」

金髪でグラマラスな女性がそう言う

「そうですね、少し羽を伸ばせます」

そこに控えめで小柄な子が相槌を入れる、そのような光景があった

「なあゝに言ってんのよ雛森。アンタは『少し』じゃなくて『結構』
休まないと死んじゃうわよ…」

「あはは、大丈夫ですよ。

他の隊長方も気をつかってくれますし、無理なんてしてないです。」

十番隊副隊長、松本乱菊と

五番隊副隊長、雛森桃である。

乱菊は戦いの後、破面との戦闘の報告や、後始末。

さらには虚討伐などを命令されていた。

いっぽう雛森は数ヶ月前の戦いで大怪我を負い、

とても良い状態ではなかったが、幸いにも回復し

その後、自分も何か手伝えればと他の隊のサポートを行っていた。

なおかつ、雛森自身が所属する五番隊は

隊長であつた藍染惣右介が謀反を起こしたため、変わりに今は雛森が隊長を代理する始末となり

更に新隊長選抜のため直々に各隊を回つたりするなどまさに「無理」をしているような生活を送っていた。

「いやいやいや、疲れが見えてるし・・・」

「大丈夫ですって！心配しすぎですよ、もう」

「うゝん。まあ、今日は休みだし！パーツと休む事にしよう、雛森
っ！」

そう言うところからかお酒のビンを取り出した

「お、お酒ですか！？それはちょっと・・・」

「なあゝに遠慮してるの！！呑むのが一番いいのよ！」

「だってまだ昼間ですし！！時と場合を考えましょう、乱菊さん！」

「だまらっしゃい！ほら、まず一杯、一杯！」

これはヤバイ、と雛森は思った

何か・・・何か逃げる術はないかなあ

昼から呑んだくれるのだけは勘弁したいよう・・・

そこにとてもタイミングよく、見慣れた顔ぶれが入ってきた

「お、松本さんじゃないっすか。こんな昼間っから呑んでたんですかー？」

「な、なんだって！？あつ、こんにちは乱菊さん！」

「檜佐木くん、鼻息がスゴイよ・・・！！」

斑目一角、檜佐木修兵。吉良イヅルの三人であつた

「あら、珍しそうなトリオじゃない」

乱菊は酒を注ぎつつ三人に手招きした

「いや、たまたま出くわしたから、三人で行くかって事になったんすよ」

ちわと雛森にも軽く、一角は挨拶して近くの席に座った

「あら、じゃあ一応仕事中だったのかしら・・・」

みんなでパーツと酒を呑めると期待していた乱菊は少し落ち込んでいたが

「いえ！今日は僕らも休みらしいです」

檜佐木が笑顔で答える

乱菊は驚いた、副隊長や隊長兼任が休んでも大丈夫なのと

すると檜佐木が少し嬉しそうに

「浮竹隊長のはからいで、日頃頑張ってるから今日ぐらいは休めと僕たちを・・・」

雛森はそれはそうだろうと思った

女性陣はともかく男性陣はずっと後始末に駆り立てられ、

ほとんど休みという休みが無かったのだ。

副隊長・隊長格となると更に、である。

（シロちゃんは・・・大丈夫かなあ・・・）

幼馴染であり十番隊隊長である彼を雛森は心配そうに思い出した

しかし、一角はそれを不満に思っていた

「でもよ、せつかく戦いに明け暮れるような日々だったのになア・・・」

近くにいた吉良がハアとため息をついた

「君は根っからの戦闘狂だからいいけど、僕は流石にクタクタだよ」

そんな吉良の背中をバンバン叩きながら

「なんすかア！？だからひ弱なんすよ吉良サンは！！」

「い、痛いよ！？斑目君！！」

そんな状況を乱菊がさえぎり、

「まっ、とりあえず休みなんだし！ぱつと呑みましょう！！」

そう言つと店の人にお酒をまた頼みだした

檜佐木はノリよくいいですねと了解し

一角と吉良はケンカしつつも酒の席に同席するのだった

そのなか雛森は

「あ、あの。私少し用事思い出したから！かえるね！」と早口で言つた

もちろん乱菊はいいじゃないのと止めに入つたが振り切り、店をでた

流石に乱菊さん一人置いて帰るのは忍びなかったので、

三人が来たことに感謝する雛森だった。

「シロちゃん、大丈夫かな？」

やはり心配になり、とりあえず十番隊へ向かうのであった。

処変わり・・・

- 護廷十三隊 隊首会室 -

そこには護廷十三隊総隊長である

山本元柳斎重國が奥に座り、

その周りには兼任以外の隊長格が立っていた

傘をつけた男が尋ねる

「んで、山じい。隊長なんてそろいもそろわせて、何があったのさ？」

彼は八番隊隊長 京楽春水である。

「うむ。今朝方のことなのじゃが、技術局から謎の靈力反応を流魂^{るこん}街^{がい}の外れで確認したらしくてな」

このようなケースは珍しくない。大抵は虚が暴れているということだ

「また虚か・・・なに、それならこんな集まる必要もねえんじゃねえか？」

更木剣八が言つと

「それなりの理由があるのでしょっ？」

卯ノ花が本題を聞き出そうと元柳斎を見た

「その通り。ただの霊圧ではなく、何か異色を放っているということなのじゃが」

それにハッとした用に日番谷が

「まさか・・・破面ですか!？」

その声に少しからず皆が息をのんだ

「もしかすると、じゃがな。」

「まア、その可能性は極めて低いヨ。ただ、『普通』ではないけどね。」

横槍を入れるように涅マユリが説明を言う

「今、これは脅威ではないはずじゃが、ワシとしてはこの時期に騒動を起こすのもいかなと思っのじゃ」

「おやおや、ずいぶん優しいじゃないの」

京楽が頷きながら感心する。

「では、ここにおる中で空きがあり、率先してこの件を解決できる者はおるか？」

この言葉を境にシーンと静まり返り

その後、日番谷が「やります」と強く言い、拳手した。

「日番谷か・・・では、他のものは必要時には援護に回ってもらおうぞ。よいな。」

全員が了承したような挨拶をし、一人ひとり、隊首会室を出て行った

「日番谷、ちょっといいかな？」

その中で日番谷は呼び止められ、返事をし、元柳斎の元に寄った

「あくまでこれは機密任務じゃが、だからと言って一人で行けとは言うとらぬ。

信用できるものを何人が連れて流魂街に向かってくれ。

あとな、お前は働きすぎじゃ。ついとして休んでくるがいい……」

そう言った後、日番谷の肩をポンと叩き、任せたぞと言い出て行った。

心配されるほど俺は頑張ってるのか？と日番谷は思ったが、表情に出さないようにした。

まあほとんどは使えない部下のせいで仕事が増えるのだ。乱菊の顔を思い出し少しイラッとしたが

誰を連れて行くか、と悩むほうに意識をそらした

正直、ただ普通に倒しに行くだけでは彼は率先して立候補しなかっただろう

ただ、知らされた流魂街の場所が自分の「お婆ちゃん」であった人が住んでいる地域に

あまりにも近かったので心配になり手を上げたという事もある。

乱菊や雛森にはバレてしまっただろうから黙ってようと日番谷は思った。

「一難さってまた一難。とならなければいいが・・・」

短くため息をつき、隊首会室を出るのであった。

episode 2 - 人は世、世は情け - (前書き)

― ひらひら舞った、その先に

あるのは生か それとも死か

めざめよめざめよ 恐怖の人よ

おそれよおそれよ 彼の人を

彼は 鬼か、それとも死神か―

episode 2 - 人は世、世は情け -

——謎の反応が確認される一日前

- 西流魂街1地区 潤林安 付近の森 -

体中が、痛い

崖から落とされたみたいだ

そう重い彼は目を覚ました。

まずは立ち、周り一面見てみたが

どこも木、木、木。

「ここは、どこだ・・・」

私はなぜ、ここにいるのだ・・・!!」

なぜだ、なぜだ、なぜだ、ナゼダ

わからない。何も。わからない。

彼、石田三成はただ、ただ、叫んだ

めぐりめぐるは誰の知らせか？

凶王三成は霊になり、二度目の生を受けたのだ

まるで、別の世界で。

気がつけば、辺りがオレンジ色になっていた

「私は、何をしたらいい・・・教えてください・・・秀吉様・・・!!」
どうしたらいい、それしかない。私には・・・何もわからない。

足元がおぼつかなかったが歩き出すことにした

混乱しながらも覚えているのは

秀吉様と、憎き家康だけ

一度頭を整理し、冷静に考えることにする

「私は、一度死んだ・・・家康に殺された・・・
だが、なぜ、なぜ痛みを感じる！！なぜ生きている！！」

疑問ばかりだった。もしかすると死後の世界なのかと考えたが

あまり深くは考えなかった

ただ、何かあるまで歩く、それしか…

どれくらいだろう。日が落ちて少しした後、

光があるのを見つけ、歩きながら少しずつ寄ると、小さな集落が見える

その瞬間彼の糸がプツッと切れたように倒れてしまった。

（どうしたものか、動けない…やはり私は死ぬのか、一体何だというのだ）

やはり混乱するばかりである。

彼が意識を失いかけたその時に、誰かの影が彼に近づいたが

気にする余裕もなく、そのまま気を失った

彼の目の前にあるのは、ただただ闇、闇、闇。

またここか

私はここで死ぬのか

さっきのは何だ、夢か

殺るならさっさとしろ

どうした・・・一体、何だというのだ・・・

暖かい布団の中で目を覚ます

「どこだ…ここは」

「ここは西流魂街の潤林安だよ・・・それよりあんた、随分傷だらけだったけど大丈夫かい？」

そこには老婆がいた。小さく細くて、いつ死んでもおかしくない様な

「誰だ、貴様は。なぜ私がここにいる」

「おやおや、口が悪いね・・・わたしが村の人に頼んでわざわざ助けたのに」

老婆は厳しい顔をしたが、そんな老婆を睨み

「誰が助けると言った！！貴様のような者に命を助けられるなら死んだ方がマシだ！！」

すると老婆が急に怒り

「そんな事を言うんじゃない！！」とすごい剣幕で言われてしまったそれに負けずと三成も睨み返したが、老婆はそれを見てため息をもらしつつも

「・・・まあ、悪い子だけど元気そうでよかったわ」

といきなり態度を急変したので、これには三成も少し動揺した。

老婆は立ち、何かの準備をしだした。たぶん料理か何かだろう。

三成は今一度自分の立場を考え直した

痛覚、嗅覚や触覚がはつきり有り、とても夢うつつとは思えないことから

自分は生きているのだと再確認した。・・・何故かはわからないが。

そして気になったのは流魂街の潤林安という地名。

日ノ本にそんな地域あったか、あったとしても蝦夷や琉球の地であろうと思った

ならば自分はどうしてここに来たのだ・・・と、唸りながら考えを巡らせた。

しばらく無言が続いたが

急に老婆がおかゆのようなものを差し出し、

「お食べ」と言った。

三成自身は、「食」に対してさしたる興味がなく

刑部にロクに飯も食わずして大丈夫なのかと心配されるほどであった

「いらん、喉も通らぬ」

「あらまあ、年頃の男の子がそんなんじや元気つかないよ!」

ほら、ほらと催促されてしまった

この老婆・・・強引に食わせる気が・・・

またイライラしたが、それを押さえ、あくまで冷静に行こうと考えた

「わかった、だが一杯しか要らん」

こんな風に妥協することは普通はあまり無い

今は少し混乱してとりあえずその場に合わせる形になっている

ほんの少し、盛られたおかゆを三成はすぐさま食べ終わり

乱暴にお椀を差し出すのだった

老婆が皿を片付けている途中に

「その白い髪…うちの子を思い出すね…」

感傷に浸るように話し出した。

三成は特に聞く必要はないと思っていたが

一種の情報収集になるかもしれないと、一応聞くことにした

「気はそこまで強くなってナヨナヨしてたんだけどなあ・・・

いつつのまにか立派になって、わたしに心配かけないようとか言うて行ってしもうた」

聞いて損した。ただの孫自慢か。

「フン、今頃どこかで野垂れ死んでるだろうな、そんな奴は」

すこし怖い顔になりながら老婆が言う

「本当に失礼な子だよ。まあうちの子は今、死神なんかになって隊長までなってしまったしのう」

死神？ この時三成はやや疑問に思った

織田の第六天魔王のようなあだ名だろうか、確か織田を討った明智はそのような名前で言われていたはず

それに隊長だと？ もしかするとそんな名前の部隊なのかと、考えでもよく分からない事ばかりだった

「おい、少し問うぞ。」

三成側から質問されると思っていなかった老婆は少し驚いたが優しい声でなんだいと聞き返す

「死神とは何だ？それは部隊名か、それとも通り名か」

「アンタ、そういう事は何も知らないのかい・・・？」

心配そうに三成を見た。まるでここでは皆知っているようなそぶりで老婆は言っているのだ

「知らん。俺がいた場所では聞いたこともない」

そうかい・・・と何か考える様子を見せた老婆だったがその後すぐに死神についての事を教えてくれた

・・・

・・・

・・・

「・・・という事なんだけどねえ」

ふざけるな、何が虚だ、何が護廷十三隊だ

わけがわからん・・・

三成は更に混乱した。

なんせまだ日ノ本に居るばかりと思っていたが、気づけば異世界のような所らしいからである

この老婆が嘘をついているのだと考えたが、話している様子を見る限り、そうではないらしい

ならば夢か、幻覚か・・・

「まあ、あんたがどこから来たのかは分からないけどこういった死神さんのおかげで平和って訳だからねえ・・・」

どうやら武將的な役割でもあるらしいな、その死神は

とりあえず今、私はよくわからない場所

どろどろの化物が出てくるような地で

そこの偉いのが死神という奴等らしい

もつとよく理解するためには死神共と接触しなければならないようだ

面倒で反吐が出る。刑部がいれば楽にすんだらうに・・・

「分かった。」

そう一言言つと家を出ようとすると

「お、おい、ちょっとお待ち。せつかくだから泊まっていけないのかい？」

手を捕まれ心配そうな声で止められた

三成は今すぐにも現状をどうにかしたいと思い、ここから向かうと考えていた

「離せ、私は行かねばならん」

容赦もせず振り解こうとしたが、それに負けずと食いつくように

「今は暗い。せめて明けてから行きなさい。どうせ道も分からんでしょう」

と言われてしまった。

面倒だ、今ここで斬捨てようかとも考えたが、確かに道は知らない
この老婆、泊まらねば教えぬつもりだろう。脅しも効かぬ。

眉間にシワが寄るばかりだったが、ここは妥協した

「いいだろう、だが明け方すぐにここを出る。その時は道も教える。

」

乱暴な言い方だったが、老婆は安心したようにそれがええそれがええと言っていた。

「面倒だ・・・なぜ私がここまでしなくてはならん・・・」

愚痴を吐くばかりな三成であった。

- 所在 不明 -

「殺してやる、殺してやる」

「私には、復讐しかないのだ・・・」

「*#エa@!!...5%#*!!..!」

「貴様も貴様の仲間も、何もかも、すべて、殺してやる!!..!」

「うおおおおおおおおおお!!!!」

その次の日の朝、咆哮と共に「恐怖」が現れた

それは、三成にとって、死神にとって「どんな恐怖^{あいて}」となるかは

まだ・・・

episodes - 何があるつと、何があれば - (前書き)

―お行きなさいと 声がする

それでは私は 一足お先

あなたも追々 来やればよい

私は ゆっくり 歩むから―

episode 3 - 何があるつと、何があれば -

「・・・む」

ふと眩しさを感じ、三成は目を覚ました

日がやや昇っているようだ。朝にしては高すぎる。

もしや寝すぎたのであろうか

いや、それはないだろうと自分に言いきかせた

食事同様、三成は寝ることすらあまりしなかった

「眠る暇などない、さつさと次の地へ向かうぞ」

彼はよくそう言っていた。疲労などまるでないかのようだ。

しかし三成以外は休まねばやっていけない

どこへ行っても戦い、戦い、戦い・・・

勝ったとしてもこのままでは死んでしまう

三成から家康に離反する兵はこれが原因であるという説もある

これを見かねた刑部が三成に少し休ませろと言わなければ

三成の軍はもつと縮小してたであろう

と、いう事柄もあるくらいだ

寝すぎた、などとは笑いの種にしかない

とりあえず時間を聞かねばならない

三成は老婆を探した。探したと言っても家の中を軽く見回っただけだが。

決して広くはない家だ、台所にでもいるのだろう

「どこだ・・・あの老婆め・・・」

見つからなかった。

台所はおるか厠までいない

逃げたのではないかと考えた

やつは老いた”追いはぎ”で刀や鎧を奪っていったのではないかと考えたが

逆にキレイになって壁に立てかかっていたところを見るとそうではないらしい

「おや、目覚めたのかい？」

後ろから老婆の声が聞こえた

「貴様・・・どこに行っていた！？」

「おやおや、少しいなくなっただけで何そう怒るのかね・・・」

軽く微笑みながら老婆は家に入っていた

三成はまるで心配していたぞと言ったようで、嫌な気分になった

「いやね、この近くで大きな虚があるみたいだね・・・少し隣町に避難しようと町の人と相談してたのさ」

言いながらせつせと台所に行ってしまう

虚・・・といえば昨晚話していた化け物か

別に怖くはなかった、むしろ相手にすらしていない

戦国の世でも實力は上の上と言った所の三成
負けは家康との戦いしか経験していないので、彼には倒されるイメ
ージがなかった

それより待て、避難するだと？

この老婆、案内を忘れた訳ではないだろうな
三成は少しイラッときつつも老婆に尋ねた

「待て、案内はどうした」

ああっ！台所から大きな声が聞こえる
やはり、忘れていたのか。斬捨てようかと刀に手を伸ばす

「ごめんね、とりあえずご飯食べてからにしましょう」

「飯などいらん、早く教えろ！！」

「まあ落ち着きなさい、いつ恐ろしいことがおきるかわからないん
だ、今だけでも一膳、いただきなさい」

この老婆の言葉には何か力があるのだろうか

拒否しようとするが、どこか少し、受け入れてしまふ自分がある
まるで秀吉様がいた頃の私のようにだ

「・・・一杯だ。それ以上はいらん。食い終わればすぐ道を教える・
」

はいはい、とにこやかに釜からご飯を盛り三成に差し出す
急ぐ気持ちを胸いっぱい貯めつつも少しずつ飯を食べた

そう言えば、時間を尋ねると今はもう昼らしい
やはり寝すぎていたのか・・・不甲斐ない。

疲れたら寝る、腹が減ったら飯を食う

そう、まるで何か大きなものが胸から抜け落ち
少しずつ自分が「只の人」に戻っている事を
三成は何となく気づき始めていた

・西流魂街1地区 潤林安への道・

「ねえ雛森！！潤林安って何かおいしいお店ってあるの？」

「んー・・・美味しいお茶屋さんならあったかも、それ以外は乏し
い・・・かな」

「まあ何も無いって訳でもないでしょう！！色々歩き回りましたよ
よー！！ねっ、隊長！！」

「・・・松本、これは一応任務なんだ。あまりふざけるなよ」

「あら、隊長お堅いのねー、でもせっかくの帰郷なんだし、少しは
遊びましょうー！！」

こいつ、無理やりでも遊びに持ち込む気だろうな
日番谷は頭をかかえた。そもそも何故こうなってしまったのだろう、
と

・時は遡り、早朝
はくとうもん
西・白道門前・

結局考えたところ、自分で言い出したのだ
自分ひとりで行くべきだとなり、手紙を隊長室に置きここまで来て
しまった

藍染との戦い以来、日番谷は自分にスティックになっていた
力の無さを実感し、隊長としての実力をもっとつけたい
訓練ではなく任務だがこれは修行になるかもしれない
勝手に自分で決めつけ、一人で向かおうとしていた

乱菊は下手するについて来てしまうので
あくまでも「秘密」に事を進めた・・・つもりだったが

「行くか・・・」

「隊長！どこ行こうってんです？」

後ろから聞きなれた声が聞こえてしまった
まさか、まさかだろう

日番谷は無視を決め込んで進んだが

「なに無視してるんです！この悪い子めっ！！」

首根っこを掴めさすがにキレた

「何すんだ松本！・・・何でここに居る」

精一杯睨みながら松本に目を合わせたが
朝から全力な笑顔で、どうもため息が出た

「昨日から少し様子が変わったので、檜佐木君に聞いて回っちゃいました！」

言いながらへへ、と笑う

檜佐木副隊長・・・後で覚えてるよ

それと、と付け足しながら松本が何かモジモジしていた
何ださっさと言えと言おうとしたが、松本の後ろから現れた人物によつて

遮られてしまった

「雛森・・・？」

「あ、あはは、ついてきちゃった。シロちゃん」

居て欲しくない人物だった

まだ一角や檜佐木なら戦力の追加だなと捉えたが

何せ雛森である。彼が今一番守りたい人物が出てきてしまった

「何でついてきたんだ・・・お前は」

少し、ほんの少しだが苛立ちを込め言った

「昨日、十番隊の隊舎に行ってもシロちゃんいなくて・・・
たまたま隊首会室の近く通ったら潤林安の近くで何かあったって聞こえて。」

そしたらシロちゃんが任務に行くって・・・」

「それで・・・それでね」

「そう、ついてきちゃったって訳ね」

松本がご機嫌そうに話をまとめてきた

「お前たち、遊びじゃないんだ。敵は破面の可能性だってあ「だから尚更心配じゃないですか!」」

松本がいつの間にか真面目な顔をしている
俺が何をしたらって言うんだ

「心配・・・なんですよ。隊長、このごろ根詰めすぎだし休みもしないで、訓練ばかりして・・・
今何かあったら嫌なんですよ、せつかく大きな事件がおわって平和になったのに・・・」

俯く。泣いているのだろうか。

先日の戦い、市丸ギンは死んだ

彼は反逆者ではなく「三番隊隊長」として死んだ

後から松本が説明し、判断された事だった

いつも気に障る態度でいいやつだと思ったことは無かったが

彼は彼なりに悪を定め、それを斬ろうと思っていたのだ

松本はずっと信じていた。市丸ギンは悪役ではないと

だが、結局・・・

その事を思い出したのかもしれない

悪い事をした、日番谷も少し俯き

「悪かった、だが大丈夫だ。俺は死なない。戻ってくる」

身近な人を亡くすのは辛い

それが信頼していた相手ならば尚更だ
俺は彼女らを悲しませたくない

だけど、俺一人だとまだ彼女たちを守り通せない
だから・・・おいて行こうと、決めたのだ
そう二人に説明した

「そんなの、自分勝手だよ・・・」

「雛森・・・だから・・・」

「私も、乱菊さんも自分の事は自分で守れるよ!!
足手まといになんかならない・・・」

「そうよ、他人の心配より、自分の心配してなさい!!」

雛森も松本一步も引く気配はなかった。

「でも・・・でも俺は!!」

「いいじゃない、日番谷くん」

急に現れた人物に言葉が遮られてしまった
驚いたことに、そこに居たのは京楽隊長であった

「女の子からのお誘いはそう断るもんじゃないよ」

ニヤリと笑い、日番谷の肩にポンと手をおく
突然の来訪に驚いて言葉が出なかったが、ハッとして言い返した

「ですが、私の実力では彼女たちに危険が・・・」

「一応、私たちも副隊長です！！決して迷惑にはなりません」

「なんど追い返そうとしても反論されてしまい

日番谷は無理矢理逃げようとも考えていた

「まあまあ落ち着こうよ、日番谷君も、ね？」

京楽に諭され、場の雰囲気は落ち着く

「とりあえずねえ、日番谷君。これ、山爺からの仕送りってやつだよ」

巾着袋を差し出され、とりあえず受け取る

「なんですか・・・これ？」

「だからあ、仕送りだって」

中を確認してみると、結構な額の環が入っていた

これは一体、と思い京楽に問い詰めようとしたが

京楽はニヤニヤするばかりで、どうも上手く運びそうもなさそうだ

「とにかく、あれだよ、一種の『休暇』だとも思えって事じゃないの、日番谷隊長」

すこし莫迦にしたようにからかう京楽に日番谷は激昂して詰め寄る

「きよ、京楽隊長！ふざけないでください！！」

仮にもこれは任務なんですよ!!」

「悪い悪い、まあ追加の報告もあるんだよ日番谷くん」

「追加?・・・何か動きがあったんですか」

ああそうだと頷きつつ、ゆらりと詰め寄られた分距離を離す

「反応の解析が『しつかりと』できたみたいでね、
昨日早朝の反応は破面^{アラソカル}じゃなく虚^{ホロウ}みたいだよ」

京楽がゆったりと話した言葉に
少し、ほんの少しだがほっとした自分が居た
今の自分には破面は脅威である。

さらに、尸魂界に進入できるのだからそれなりの実力はあると見て
いた

だからと言って油断はできない

「そう・・・ですか」

「ああ、虚なら・・・まあ日番谷君の敵じゃないよね?」

不適に笑う

やはりこの人とは話しづらい。だが、私をねぎらっているのだろう

「だから、その子たちも連れて行ってあげたら、どうだい?」

やはり、この人は敵だ

その後も口論はしたものの、京楽にうまく纏められてしまい
3人での出発となってしまった

松本・雛森は喜び二人ではしゃいでいた

そして当の京楽本人は

「じゃ、そろそろ七緒ちゃんに怒られちゃうから」と隊舎に向かっ
て行き

去り際に「乱菊ちゃん、帰ってきたらまた飲み会しよう!」と捨て
台詞を吐いて行った

これからが大変だ・・・面倒にならない方がいいが
日番谷は一人、頭を抱えていたのだった

そして時間は過ぎる

事は日番谷の思った通り、上手くいかないものである

松本は雛森とひたすら話している

日番谷は面倒なので話しかけられても適当に返し、
とりあえず足を速めた

移動については歩きだ

本来なら移動用の乗り物を手配するのだが

何せ急ぎで用意できなかったのと、潤林安は瀟靈廷から近いので
歩きでも充分だと思ったからである

松本はブーブー言っていたが、うるさいので無視する

「ねえ隊長、そういえば寢床はどうしますか?」

言われて気づく、・・・考えてなかった

「あつ、その顔、まさか考えなしで行動してたんですか!？」

凶星を突かれる

どうもいざとなると俺は上手く事が運べないらしい
かろうじて総隊長からいただいたお金はあるから、
宿にでも泊まればいいだろと言おうとしたが

「あ、シロちゃん。せつくだし、お婆ちゃんの家泊まらない？」

雛森め・・・日番谷はため息をほく

それだけは避けようと思っていたのだ

帰郷するときは本当の休みにいつも帰っていた

しかし今回は任務の途中

変な心配をかけさせたくない、

そして巻き込みたくないと思っていたのだ

「あのなあ雛森、もし何かあつてからでは遅いんだよ
だから出来るだけ「いいじゃないですか!日番谷隊長!」」

つくづく厄介な女達だ・・・

さすがに雛森は少し申し訳なさそうにしているが
松本に限っては・・・帰ったら仕事増やす。絶対にだ。

「・・・分かった、だが寄るだけだ。

泊まりはしない、分かったな？」

雛森は嬉しそうに返事をした

治療や仕事で、俺以上に祖母にあえなかったのだ

久々の帰郷で嬉しくなり、さつきもつい言ってしまったのだろう

「あたし、隊長と雛森のお婆ちゃんに会うのってあの時以来ですよ
ね・・・」

松本も祖母には一度会っている

日番谷を死神に諭した時だ

本人にしてはあまり思い出したいくないこともある

「覚えてるかなあ・・・あたしのこと」

頭をかき、バツの悪そうに話す

日番谷は覚えているだろうとサラっと言い
足を速め、置いていくぞと声をかけた

「嫌なこと、思い出させちゃったかもね」

松本は雛森に小声で話しかけ

自分の言ってしまったことを後悔していた

「大丈夫です、乱菊さんは悪くないですし・・・」

「でも・・・ねえ」

「おい、何をやっている。本当に置いていかれたいのか？」

日番谷から冷たい野次が飛んできた

へえへえすみませんーとノロケた返事を返し、松本はタッタと後を追った

「大丈夫ですよ。シロちゃん、めげるほど弱くなりましたから」
誰に言ったのかは分らないが、
雛森はそう呟いて二人の後を追うのだった

時間は過ぎ、昼になっていた

何故こうも遅れてしまったのかといえば

松本が途中で「もう歩けな―い！！」と駄々をこねたのから始まり
雛森までわ、私も！！と珍しく乗ってきたせいだ

仕方なく道中見つけた茶屋に立ち寄り休憩したが、
松本が休むと横になった後に爆睡してしまった

起こすがまったく動かない

雛森いわく、

「昨日さんざん呑んでたし、しかも今日早かったから
疲れてるのかもよ？」と・・・

「酒は自業自得じゃねえか！！何が疲れてるだ！！仕事もしねえ癖
に！！」

堪忍袋の緒が切れた

その後、無理矢理叩き起こすが

どうもまだ寝ぼけているらしく、引っ張っていく形になり
尚更遅れてしまった

「何で、コイツは、こうも、邪魔ばかり、するんだああ！！」

「シロちゃんおちついて！！乱菊さんも起きてええ！！」

傍から見ればコントの類になるだろう・・・

だが潤林安は目の先、もう少しだと思ったが、日番谷は異変に気づく何かおかしい・・・

ドサツと無理矢理乱菊を地面に下ろす
いったゝいなどと聞こえるが無視だ

「ど、どうしたのシロちゃん!？」

何かおかしい、潤林安はそこそ明るい町だった

だが今は人の声すら聞こえない、明らかに・・・異変だ

「気をつける、もしかするとすぐ近くに虚が居るかもしれない・・・

」

虚という言葉にさっきまで寝ていた松本も人が変わったように
目を鋭くし、雛森はいつでも鬼道が撃てるよう構えた

ドン!!と近くの家が壊れ、少し大きめの虚が姿を現した

「現れやがったな・・・松本、雛森。決して気は抜くな!!」

はい!と返事をし、三人は虚に向かっていった・・・

episode - 何があろうと、何があれば - (後書き)

しばらくぶりの更新、遅れてしまい申し訳ない

あと1話の一角の会話部分を修正。

一角は先輩(副隊長)には一応の敬語?を使ってるみたいなので

あと環なんですけど、尸魂界の紙幣らしいので
使ってみました。．．分かりずれえ!!ですよ。

episode 4 - 逃げるか、追うか - (前書き)

―進め 進め

ここは我の地 いざ進め―

episode 4 - 逃げるか、追うか -

飯をたいらげ、さあ案内しろと三成が言おうとした時に
ドン！と遠くで音がした

老婆は驚き、外に駆け出した

「何かあったのか・・・？」

三成も追々と外に出ると

どうも大きな町があると言っていた方から
煙が出ている。火事でも起きたのだろうか

「どうしたんだろうか・・・」

老婆は心配そうな顔で町の方を見ている

何せ、少し前まであそこで友人と話していたのだ

ここは何か厄事に巻き込まれなかっただけ喜ぶ場合が多いのだが
この老婆は自分より他人、といった様に人を心配しすぎているようだ
先ほどから動揺し、その細い足でウロウロとしている

『どうにかしてやりたい・・・』

普通の三成ならば考えつかないような事が頭の中に浮かんだ
やはり、ここに来てから私はおかしいらしい

「待っている、見てきてやる」

老婆はそんなと言おうとしていたが
それを無視し、家の中にある鎧を着て
刀を乱暴に持ち、町の方へと駆けていった

その頃、日番谷は少し苦戦していた
大きな虚1体が暴れているのなら3人でうまく対処できる、できた
のだが・・・

松本が左から虚を誘導し、雛森がその横から赤火砲で応戦し
相手に明確なスキができた時に日番谷が懐に飛び込み
虚の腹を切り込んだ。この一撃をくれば、普通の虚程度なら死ん
でいたはずだった

だが事はそう上手くいかず、
裂けた部分から多数の小さな虚が出てきたのである

大きな虚の切られたはずの部分は、小さな虚がまるで絆創膏のよう
に覆いかぶさり

あっという間に切られる前に戻った

結果は虚を増やすだけ、悪化もいいところだ

兎に角、三人で小さい虚の駆除にあたりつつ、大きい虚は回避だけ
行ない

距離をとることにした

わらわらと寄って来る小さな虚共をなぎ払うが、一片でも塊があれば
近くの塊と合体し元に戻るようだ

「ちいっ！！斬っても斬っても無駄か・・・」

「隊長！どうも一筋縄ではいかないみたいですね・・・」

松本はあらあーと言いながら話しかける

どこまでも能天気なやつだ、もしまだ奴に奥の手があるならどうしてくれるんだと

日番谷は悩んでいた

「話す暇があるなら斬れ！！」

——君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ
真理と節制 罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ！！

「破動の三十三！蒼火墜！！！」
そうかつい

ボウと音を出し、複数の小さな虚が燃える
コゲた破片は少しずつ動く
まだ生きているようだ

「し、シロちゃん、まるでキリがないよ！」

雛森がどうも苦戦しているようだ
松本に指示を出し、雛森の救援に向かわせる

「増えるなら、凍らせて一撃で叩くまでッ！！」

「霜天に坐せ・・・『氷輪丸』！！！！」
ひょうてんにまゐせ 氷りんまる

辺りが冷氣に包まれ
大きな虚が少しおののく

「氷輪丸」

これが日番谷の斬魄刀の名前であり、本来の姿の一步手前だ
名の通り、その能力は氷チカラを操る

総隊長の斬魄刀のような火や浮竹の水、他にも能力に属性が加わるものは何人かいる
だが彼のように氷を操るのは特例で、今まででも例を見なかったそう
だ

もちろん、威力もそれを引き立てる程にある

「松本、雛森！！一撃でケリをつける、出来るだけ離れている！！」

了解」と声が聞こえた

松本が雛森をひっぱり、気配が遠くなったのを感じると
氷輪丸を強く握り、敵を睨みつけた

「行くぞ！」

敵の攻撃をかわしつつも少しずつ近くに詰め寄る

小さい虚はたたき切って捨てる

斬られた虚は切り傷から少しずつ凍りつく

日番谷が大きな虚に近づくほど、大気中の水が粒になるのがわかった
虚は何かを察し逃げようとするが足はすでに凍り付いていた

暴れる事もままならず、次々と氷の塊が虚にくっつきついに完全に
凍結する

小さな虚も凍らせ、蹴散らしながら日番谷はついに目前まで迫った

「終わりだ

― 砕け、竜霰架りゅうせんか！！！！」

氷が砕ける音とともに、虚たちが完全にバラバラになった

これでは虚も復活できまい

日番谷は一安心した

遠くから見守っていた二人も駆けてよって来る

「やりましたね隊長！！これで一件落着、と！！」

「よかったぁ・・・」

二人が喜んでいたが、まだ気は抜けない
とりあえずは気を抜くなと警戒し、住民の安否を確認して回ることにした

数十分見回ってみたが、一人として人は見当たらず
もしやすでに・・・と考えたがそれは最悪の場合だと自分に言い聞かせた

だがどうやら、今回は最悪の部類なのかもしれない

「ここも・・・駄目か」

日番谷はある一種の焦燥感に書き立てられていたのかもしれない
祖母が心配な気持ちで一杯なのだ

だが、ここで搜索を放棄し、助けられる人を助けられないようでは
隊長としては失格である

自分の事より、まず他人だ

そう言い聞かせ、とりあえずは搜索を続ける

松本はそんな様子の日番谷に気がついていた
だが彼女も副隊長、その辺の理由は察している
なので、いつもより「しっかりと」搜索を終わらせようとしていた

しかし、搜索は外の爆音により遮られる

敵の増援か！？日番谷はいち早く外に出て確認する

やはり、さっきと同じ虚が3体も空間の割れ目から這い出てきた

「コイツら・・・どこから現れているんだ！！」

焦りの気持ちから、一瞬で片を付けようとする

「松本！！ここは俺がやる、お前は雛森と他の民家を確認しろ！！」

日番谷の本気を感じ取ったらしく、松本は素直に頷くと
雛森を連れ歩法ほほうで距離を取る

「容赦はしない、一瞬だ！！」

正 解 ！

まさに氷の龍を開放しようとしたその時だ
虚の背後から藤色の刹那が見えた途端、虚の動きが止まり
その後、一瞬で塵となる
虚がいた場所には大きな砂煙が舞い上がった

日番谷は動揺を隠せなかった

他の二人にいたっては何が起きたのかすら気づかなかった
日番谷が片付けたようには見えなかった、それだけだ

砂煙が収まっていくにつれ、向こう側に人型が見えた

生存者か、はたまた新手の敵か

警戒心だけは解かないようにし、斬魄刀から手は離さない

砂煙が完全になくなるまでジッと見続ける

——そこにいたのは紫と黒の鎧をまとい、手に長い刀を持った男

「誰だ貴様らは、ここの住人か？」

今、日番谷は一人の凶王と相見えた
齒車が、やっと少しずつ動き出す——

一時は少し戻る――

三成は町へ走った

自分がなぜこうしてしまったのだろうと考えたが
体が先に動いてしまっているのでどうしようもない

たぶん火事だろうと思ひ大事には考えていなかった三成だが
茂みの中から突然現れた存在によってその考えは打ち消される

一瞬、茂みに妖気のようなものを感じ

後ろに飛びのいて様子を見る

すると人間の言葉とは思えない何かを発しながら
胸に穴の開いた巨体が襲い掛かってきた

三成は決して焦らずに攻撃を回避し、思う

そうか、これが老婆の言っていた化け物ホロウというやつだな
攻撃に移ろうと刀を抜き、刹那――

――号哭ウウウウ――

三成の姿が消えたかと思うと

一瞬にして敵は横に切断されていた

なんだ、化け物といえど呆気ないなと三成が思ったのもつかの間、二つに切られた虚が切り口から大量の小さな虚を生み出し、尚且つ真つ二つになった自分の体をくつつけようとしていた

確かに、これは化け物だなと思った

どうすればいいとは考えなかった

ただ、斬って、斬って、斬ればいいだけのこと

一旦刀を鞘に収め、群がって来る虚に

「散れ、クズが」と浴びせる

三成が少し力んだと思った瞬間、虚たちの動きが止まった

——ざんかい 慙悔 ——

虚が一瞬で塵となり、そこには何かがいた形跡だけが残っている
慙悔は『空間』を切り刻む技、いくら虚だとしても回避は不可能だった

「くだらん連中だ、まだ官兵衛の方がいい相手になったわ・・・」

つまらなそうに吐き捨てては町の方にまた走り出すのであった

間、また別の集落で一度止まる

ここに老婆の友人がいるのだろうか

しかし、煙はもつと先から上がっている
どうやらここではないらしい
まだ安全か、早く先に進もう

と、思ったのもつかの間

先程のような化け物があちこちから這い出てくる

「さっきの奴の仲間か・・・？」

足を止め多数の敵に向き寄る
放置するわけにはいかないだろう

「いいだろう・・・斬滅してやる！！」

三成と虚の第二ラウンドが幕を開ける

少し時間がかかった

町人が何も知らずに飛び出てくるなどのアクシデントもあり
虚から守り、戦うという形になってしまったからだ

しかし、1体の討伐にはさほど時間がかからず
ほぼ量との勝負になった

結果は三成の圧勝

町人の感謝も聞かないうちに
また三成は駆けて行った

三成がやつと到着したころ
町はまったくの気配もなく、ただの廃村のようだった

「化け物にやられたのか・・・？」

少し町を歩き回ろうとしたが、いきなり目の前の空間が裂け
先ほどの虚が3体もでてきた

まさに、だなと呟き

刀を構え少し溜めてからの、刹那――

――慙悔！！！！

再び一瞬で塵となる虚

地面が砂地だったので砂煙が舞う

にしても、

あまりの手応えのなさに嫌になる

次はもつと相手になるものを出せと思った

砂煙が晴れると向かいに黒い着物のようなものを着た

子供、その後ろに女が二人見えた。子供は刀を抜こうとしている様
子だった

とりあえず三成は問うことにした

「誰だ貴様らは、ここの住人か？」

ボケつとしているようですぐに反応は返ってこなかった
もう解決したと思われるので帰ろうか

と考えていたのだが、向こうからの一言で引き止められた

「それはこっちの質問でもある・・・お前、何者だ!？」

銀髪の子供が偉そうに言う

生意気な餓鬼だ。面倒なので無視する

「待てッ!どこに行く!？」

「聞いてどうする」

「お前が原因か?ここの住人をどこにやった」

「知らん、私が来たのは今だ」

「とりあえず、詳しく話を聞かせてもらおうか・・・」

「拒否する、私は急いでいる」

「なっ!?!やはり何か隠しているのか!？」

銀髪の餓鬼がいきなりまた構えだした

何故こうもしつこいのか・・・

「黙れ餓鬼、これは警告だ、私に構うな」

「餓鬼だと!？」

日番谷は得体の知れない人物にとまどっていたが
出来るだけ温厚に話をすすめようと思っていた
虚を倒した・・・どういった技術なのかは分からないが

敵の敵は味方という事でいいのだろうと解釈していたのに
相手のあまりに失礼な言い回しにどうもイライラを隠せなかった
それに見かねた松本が割り入った

「あ、あのうすみませんね、あたしたちここの見回りに来た死神なんです」

死神・・・？これが老婆のいつていたソレか

三成は自分の想像していたものよりも若い者ばかりなので
いまいち信用は出来なかったが、話だけは聞くことにし
相手の方を向く

「それですね、ここの町の住人が一人も見当たらないのですが、
あなたはなにかご存じないでしょうか？」

丁寧な言い回しで聞いてくる

この女、私を探っているのかもしれない
面倒だ、やはり帰ることにしよう

三成は踵を返すように老婆の家のほうに
転回し、歩き出す

「知らんと言った」

後ろからは待つてください！！と聞こえるがあくまで無視する

このままこの死神達に付いていけば自分の素性が分かるかもしれない
かったが

どう考えても新人の下っ端のような奴等に着いては行きたくなかった
もっと上官のような者でないと話が通らないだろう

こいつらは小さい奴等で見積もって8〜10歳ほど、でかい女は1

9ぐらいと言ったところか

死神の初陣はここまで若いのか、それとも人手が無いのか・・・
ちなみに三成の初陣は22歳である。彼は決して若くは無い時に戦に出たので

ここまでの子供が戦いの場にいるのが珍しかった

実例として奥州の伊達は15歳で初陣、甲斐の武田は16歳だと聞いたが

まだ寝小便の管理も出来ないような子供がいるのには流石に違和感があった

まあなんでもいいが、とりあえずこんな餓鬼共と話すのは嫌だった
三成は早歩きで立ち去っていく

「あー、行っちゃいましたね隊長・・・」

明らかにあの男は怪しい

日番谷は少し考え耽る

斬魄刀らしきものがあつたが死神だろうか？

だとしたら俺のことぐらい知ってもいいはずだが

あれでは死神という存在自体あまり知らないようだった
だとしたら一護達のような特殊な存在なのだろうか

それとも現世で目覚めた代行か・・・

・・・長・・・た・・・長！！

「隊長！！」

松本の声でふと我に返る

「そんなに集中して、さっきの人のことですか？」

「ああ、少しな・・・」

「死神ではないみたいだね、死覇装も着てなかったし」

確かに、雛森の言った通りだ

あれはただの布の鎧のようなものだった

「そうよね、ううん」

「とりあえずは町の搜索だ、終わり次第奴も追う」

先に追わなくていいんですか？と松本が尋ねるが

確かに怪しすぎるので追ってもいいのだが

先述の通り、生存者の救護が先であるのと

今相手が何か仕掛けて来ていない以上、

無理に追う必要はないと思っただ

それに、あいつにはまた会う気がする

日番谷は何か嫌なモヤモヤを感じていた

手分けし、後で合流しようと分かれてから

1地時間ほど経ったのだが

三人とも一人として人間の姿を確認できなかった

その中、雛森は搜索中妙な異変に気づいた

そう、襲われたにしても民家の様子がまるで

「いきなり消えた」ように見えるのだ

ある民家の台所には包丁が刺さったままの大根
煮詰まった鍋

茶屋には長椅子に置かれたままの団子、
地面に落ちている食べかけの串

そして何より異様なものが、そこらじゅうの道端に
その人物が「持っていたもの」が散乱している
そう、まるで「本体だけ消えた」ようになっているのだ

明らかな異変、だがしつかりと解明できない
とりあえず紙にメモだけを取り、後で技術局に任せようと思った

駆け足で合流所に戻るとすでに二人は集まっていた
雛森は日番谷にメモした事を報告すると
どうも二人とも同じような現象がおきていたらしく
町民全員が消失したようだ

「・・・異様だな、これもあの虚の仕業なのか」

「よく分からないですね、今までこんなケースないですから」

ふと松本が、隊長のお婆さんの家って確か・・・と言言葉に詰ま
った

場の雰囲気が一瞬となり、日番谷が山の方を眺める

「・・・祖母の家はここより上の集落にある。」

敵の出現がここに集中しているのなら

もっと多く出てきてもよいだろう

そう、山の中にまだ虚がいるのかもしれない・・・

決して安全だとは言えない、という事である
じゃあ向かいましょう！松本はいち早く山に向かう

流石の日番谷も無言で松本を追い
雛森も一歩送れて付いていくのであった

三人は全速で向かう。

ただ、無事を願う事しかできなかった・・・

e p i s o d e 4 - 逃げるか、追うか - (後書き)

色々適当かもしれないですが
誤字・指摘あればお願いします

3 / 9 誤字修正、文章追加・変更

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0179q/>

恐怖から出でる -BLEACH × 戦国BASARA3-

2011年3月10日17時55分発行